

本論文は、Henri Ey の主著『Études』の3つの巻、そして著者が翻訳にあたった『意識』という大部の書の詳細な読解をもとに書かれた、ネオ・ジャクソニズムに関する卓越した解説と、位置づけの論文である。著者は、とりわけ Ey の後期思想、人間学的な展開を経た後の思想へと焦点を当て、Ey 理論の根幹をなす「意識」と「人格」の二分を解説した後、その「意識」と「人格」の結節点に関する思考にも論を進め、Ey が Jackson の直接的影響からいかに離れていったか、もっというなら Jackson の構想をいかにして越えたかを跡づけている。この論文は、単なる表層的解説の閾を越えた一つの思想紹介の論文といえるものである。それは、Ey の思索を長い年月をかけて追った者でなければ決して著すことのできない論考であり、今日精神医学が進むべき道を考える際に、参考にすべきいくつかの重要な視点を提供している。

Ey 理論の根幹となっている思想は、以下の3つの点にまとめることができるだろう。1つは「狂気は自由の相関物であり、人間に自由がないとすれば狂気もない」という言葉に読むべき自由への思念である。Ey は、精神医学は「自由の病理学 (Pathologie de la liberté)」であるとすら言っている。「自由」という概念こそ Ey が人間の精神をとらえる際の基底をなすものといえるだろう。2つ目は、器質力動論 (organo-dynamique) という呼称に表現されているように、「器質因」と「心因」の二分法を越えようとする視点である。Ey は、「精神病」を「その原因においてつねに器質的であるとともに、その病的発生においてつねに心理的なもの」であるとした。Ey にとって、病態の正確な理解は、「器質因」と「心因」という二分法を越えることによってこそ達せられるものなのである。3つ目は、意識における内在と超越の二面に着目し、その2つを「体験を現実のものにする意識」と「人格系に自己を発展させる意識」としてとらえたことである。この考え方は、「意識」と「人格」の二系を分け、この2つの系が分節構造をなすという論立てへとつながる。この論文は、Ey 理論の根幹をなすこれら3つの思想について、それぞれがいかに連関しているかを十分にふまえながら解説し、われわれを Ey の立論を貫く思想のごときものへと導いてくれる。

周知のように、Ey は精神の病態を「意識の病」と「人格の病」という2つの枠組みによってとらえた。「意識の病」と「人格の病」という二分は「急性精神病」と「慢性精神病」、「可逆性の強い病態」と「可逆性の弱い病態」という二分と重なる。「意識の病」にはてんかん発作、錯乱発作、夢幻状態、妄想・幻覚体験、離人症、躁うつ状態が階層的に並べられ、「人格の病」には、性格の異常、神経症、統合失調症、認知症が並べられている。

今日、精神医学から「神経症」という概念が消え、他方において統合失調症という疾患がエピソードを中心にとらえられるようになり、さらにはパーソナリティ障害という概念の内実も曖昧になるなか、精神医学が人格をどのように扱うべきかという問いは、われわ

れに課せられた新たな地平となっている。その意味でも、いま、Ey が「意識」と「人格」の結節点をどのようなものとしてとらえていたかを知ることは、きわめて重要な視点をわれわれにもたらしてくれる。本論文は、Ey におけるこの結節点に関する思考に迫った数少ない解説とっていいだろう。

また、本論文は、Freud の「無意識」に関する Ey の考察を簡潔に示しているという点でも貴重である。Ey の「無意識」に関する議論を読み解き、それを簡潔に要約するのは決して容易なことではない。本論文では、「意識」と「人格」の区分とその結節点に関する理解を支えに、この問題にもわかりやすい言及がなされている。

さらにもう一つ、今日、精神医学が直面している問題との接点に触れるとすれば、脳における社会性の座とは何かという問題を挙げることができるだろう。この問題も「意識」と「人格」との結節点と深い関わりがある。この論文は社会性の座という問題との接点も射程に入れているとっていいだろう。

著者は、Ey が常に「精神医学は医学の中で自律性をもち、その対象たる精神医学的事実は固有の独自性をもっている」という信念を抱いていたことに触れている。今日、Ey の思想を改めて跡づけることは、精神医学を学ぶ者にとってきわめて貴重な、そして必須の知的作業といえるだろう。

(鈴木國文)